



校舎（グラウンド側）。当初は全面ガラス貼りであったが、熱効率が悪いため後に壁面部分が改修され、内側から金属パネルが貼られた。

KAIGAI & LA CARTE < Visit to HANSTANTON School >

ハンスタントン・スクール訪問

AAスクール助手 連 健夫
同大学院PhDコース 渡辺 研司

学校からやっと訪問許可の手紙が来た。イギリスで調査や見学依頼をしても、すぐには返事が得られないことが多く、手紙を出した後に電話で確認して、やっと話が進むのである。さっそく我々は車でロンドンから北に向かった。ハンスタントンは北海に面した小さな村で、美しい砂浜を持っており、夏には海水浴客で賑わう所である。ロンドンから北 150kmに位置し、途中まで高速道路を使っても、車でゆうに2時間はかかる。

村に着いてまず旅行案内所に行く。イギリスでは小さな町でも、旅行者のために案内所が設けられているので大変便利である。「ハンスタントン・スクールに行きたい」と尋ねたが最初は通じず、「ピーター・スミッソンという建築家が設計した有名な学校」と説明したら、「あー、それはスミスドン・ハイスクールだ」ということで、すぐに場所を教えてくださいました。名称が変更されていたことをすっかり忘れていた。

○

ハンスタントン・セカンダリー・スクールは、1949年に行われた設計競技で選ばれたスミッソン夫妻（1923～）によって設計された。イギリスにおけるニューブルータリズム（材料の特性を理解して素直に使用するという建築運動）の建築

として、当時大きな話題となり、近代建築史上、重要な建物とされている。その後、西ノーフォーク地域におけるコンプリヘンシブ校への編成により、1976年にスミスドン・ハイスクールと名称が変更されたのである。

村の東に向かうと、すぐに全景が見えた。まさに鉄とガラスの水平線が強調された近代的デザインであり、周囲の煉瓦建ての住宅風景と対照的である。ミース・ファン・デル・ローエが1942年にシカゴに設計したイリノイ

工科大学を連想させる。実際、彼ら自身、1946年のイギリスのアーキテクツ・ジャーナル誌に発表されたイリノイ工科大学研究所に、強い印象を持ったと語っている。しかし、似ていてはというものの、彼らの意図するところはスタイルの模倣ではなく、建築の倫理であり、建築の葛藤と批判であった。つまり、人間にとって、より親密なスペースを機能的な観点から捉えて、彼らの方法において具現化したのである。このことは、ハンスタントン以後、彼らが2度とミース風のスタイルをとらないことからしても理解ができる。

校長先生に会い、学校の概要を聞いた後、我々は自由に歩きまわることにした。



体育館。手前が後に増築された壁内プール。既存校舎との調和が図られた。



多目的な中央ホール。トップライトが設けられており明るい。両側の食堂や通廊スペースとはカーテンによって必要に応じて区切られる。



グラウンド側からの校舎全景。鉄とガラスの水平線が強調された近代的デザイン。中央ホールへのトップライトが見える。

内部は建物に奥行きがあるにもかかわらず、けっこう明るい。開口部が広くとられているのである。これは、CLASP等のシステム校舎において、内部の機能に応じて窓付きや目隠しパネルを一定のモジュールに従って取り付けた学校建築と同じ印象である。つまり、煉瓦造りではなく、鉄骨構造の建築であり、要求に従って外壁に自由に開口部を設けることができるのである。

○

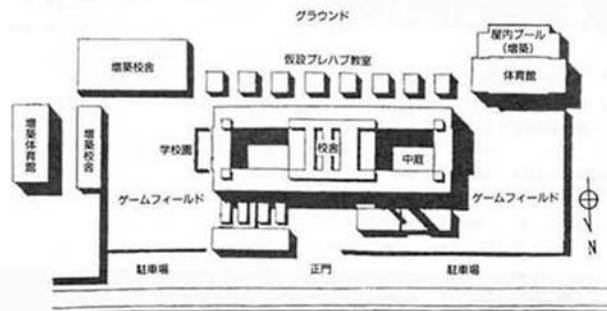
スミソン夫妻は、この学校建築で一躍有名になったわけであるが、興味深いことに、この時彼らはLCC (London County Council) というロンドン市役所の学校設計部門に所属しながら、個人的にコンペに応募したのである。当時、LCCには多くの優秀な人材が集まっており、各部門に十分な裁量を与えられていた優れた設計組織であった。戦後、数年間に、LCCの学校部門が特に注力していたのはプレハブ工法であり、ヘルズシステムの開発にあった。それは、戦後の建築資材不足の中、いかに建物を効率良くつくるかを目的としており、同時に教育施設としてふさわしい規模、配置、

動線計画を探究したものであった。そこには、正に建築の科学主義、効率主義、機能主義の流れを見ることができるのである。

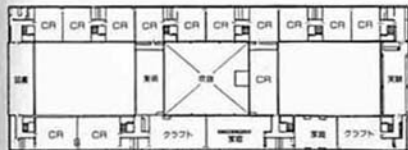
スミソン夫妻の意図したことは、この効率主義の流れに反駁することであった。事実、ハンスタントンの建物はプレハブ工法ではなく、建設工期は資材不足から遅延しており、当時ハートフォードシャーにおいてCLASPのシステム学校建築と比べたら、機能的な面を優先し

ていたとは思えない。例えば、エレベーションのデザイン上の理由から、外壁はガラス部分がかかり多くなっており、夏は暑く冬は寒いという熱効率の悪さを生んでいる。これは建築後しばらくして、壁壁等は不透明なものに改修された。

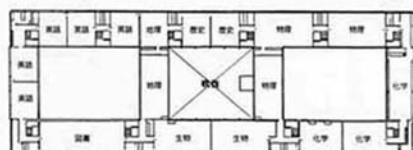
平面計画においては、教室間の移動が階段を通じてしかできず不便であることへの不満を教師から聞いた。しかし、彼らは当時、未開拓であったオープンなプランに挑戦しているのである。



ハンスタントン・セカンダリー・スクール配置図



2階平面図 (改造前)



2階平面図 (現状)



1階平面図 (改造前)



1階平面図 (現状)

すなわち、中央の2階分吹き抜けのオープンなホールを中心にして平面計画を行っており、その両面に中庭、その周囲の1階に管理諸室、2階には教室群を配し、全体として明解なシンメトリーにまとめているのである。

この中央のホールは多目的スペースであり、周りに配されたランチスペースと互換性を持ちながら、体育、ドラマ、全体集会、グループ活動等、多様に使われており、まさに、ミースのいうユニバーサルスペースを学校建築において実現させたのである。

また、運営方式に関して、建設当時はU+V型（特別教室型）で運営されていたが、コンブリヘンシブ校への編成時にV型（教科教室型）に変更され、現在に至っているのであるが、その変更に対し、建物が無理なく対応しているのである。この理由として、生徒のクロークルームが適切な位置に十分な広さで設けられていたこと、教室間の間仕切りが可動であ

り、必要に応じて移動、撤去ができたこと等があげられる。彼らが設計時に将来の変更を想定していたかは、資料等の記述からは知るよしもないが、当時、第一線の情報を持つI.C.C.において設計に携わっていたことや建物の平面構成、実際の使われ方から、彼らが将来の変更に対する建築的解決を考慮していたことは想像に難くない。

○

彼らは、結果としてニューブルークリズムの第1号としての歴史的建築を設計したことになるわけであるが、建築様式のみならず平面構成や構造計画、納まり等、様々な点において斬新なチャレンジを行っていた。そこには「我々がやればこうなる」という強い意気込みが感じられるのである。学校は現在、一時的であるが、設計当時に比べて約2倍の生徒数を有し、校舎が増築され、加えてプレハブ教室がグラウンド側に設けられている。従って、グラウンド側のエレベージ

ョンは、当時のものとは異なっているが、校舎の増築については、この歴史的建築との調和が十分に考慮されており、醜いプレハブ教室は1997年には取り払われる予定である。

この建物は幸いにも保存すべき近代建築に指定されている。彼らの作品が後世に残されることは、建築関係者のみならず、そこで学校生活を送る生徒達にとっても、大変意味のあることであろう。我々は校長に挨拶して学校を後にした。我々にとって嬉しい驚きは、この校長が現在の状況を我々に話す中で、この学校の歴史的、建築的意味をとくに強調していたことである。

●建築概要

名称：スミスドゥンハイスクール（現状）、ハンスタントンセカンダリースクール（当初）
 場所：ハンスタントン、ノーフォーク
 年数：11-16才、及びシックスフォーム
 生徒数・クラス数：約 500人（現状）、13クラス（当初）
 建設年：1954年
 敷地面積：89,000㎡
 床面積：4,120㎡（メイン校舎）
 設計：スミソソ夫妻
 構造：オフアラップ&パートナーズ



2階教室。ハイサイドライトが設けられており教室の奥まで明るい。天井はプレキャストコンクリートパネル。梁は目隠しして塗装仕上。



中庭、15m×20mの広さを持ち周囲の教室への採光、通風に役立っている。



ランチタイムの食堂の様子。売店でパンを購入したり、キッチンで温かい料理を求めたり、弁当を持参するなど生徒によって様々である。



窓際に配された男子のクロークは明るく通風も良い。十分な通路幅がとられている。